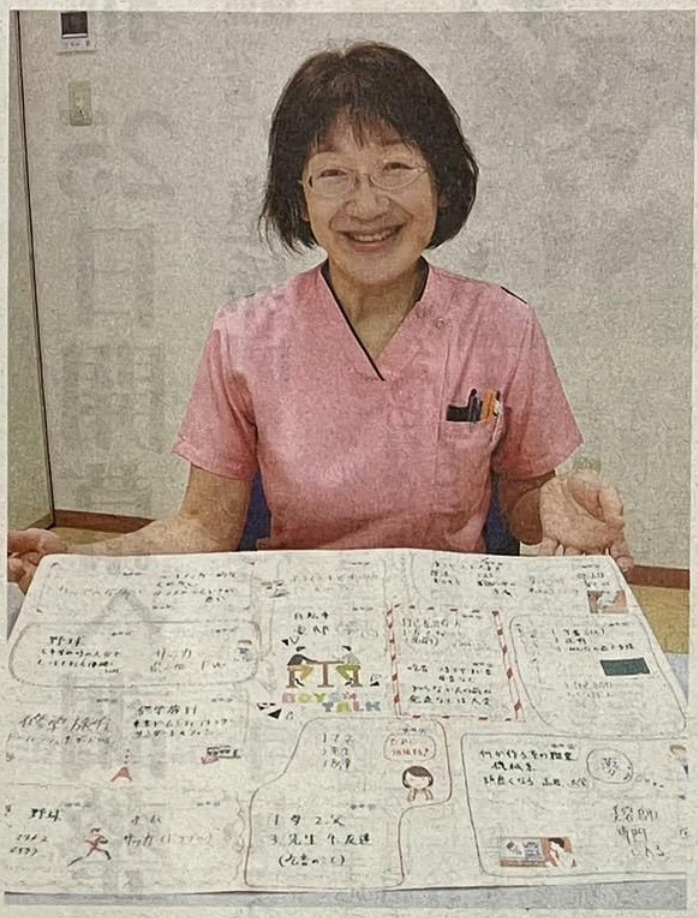
2024年（令和6年）2月21日　市民タイムス　P.29

キラリ この人 780

相談者に寄り添う言語聴覚士

吃音への理解広めたい

内藤（ないとう） 麻子（あさこ）さん（54）松本市桐1



言いたいことが頭にあるのに、話す時に言葉が詰まってしまう症状「吃音（きつおん）」の人の割合は100人に1人ほど、幼児の20人に1人ともされる。本人の緊張やストレス、母親の接し方が原因だと誤解されることもあり、周囲の理解が進んでいるとは言い難い。

平成28（2016）年から松本市の梓川診療所で吃音の専門外来を担当し、現在は筑摩2の神應透析クリニックの「ことばの相談室」で子供から高齢者まで200人以上の相談に乗る。29年に始めた県内小中学校の出前授業は今年1月に70回を数えた。相談に訪れる人たちの悩みは切実だ。せっかく就いた職業の会社名や専門用語が滑らかに言えない。高校受験の面接で受験番号や名前をうまく言えるか不安で進路を狭めてしまう。話しやすい言葉に言い換えても本当に言いたいことと違う。こうした状況は周囲が理解しづらく「薄氷を踏むような世界に彼らはいる」と話す。心掛けるのはじっくり聞くこと。「好きなことを好きなしゃべり方で話せる場所」と安心してほしいからだ。出前授業では「吃音はその人の一番楽な話し方。話し方ではなく話す内容に耳を傾けて。自分だったら、と考えられる人になってほしい」と相手の気持ちを想像する大切さを伝える。

ベビーシッターのアルバイトをしていた大学2年、単語しか話さない発達障害の2歳の子が突然「雪がちらちら降ってる」と言葉を発した。喜ぶ親の姿に「言葉には力がある」と心を突き動かされ、今の仕事を目指すきっかけとなった。

吃音はしゃべりづらさはもちろん、周囲の不理解による苦しさが大きい。学校や医師など、さまざまな立場の人と垣根を超えてつながり「子供たちが自分らしさを発揮しながら成長できる環境づくりを支援したい」と願う。

（田中千絵）